



茸と人間の真実

牧師 山本 護

夏と秋が行き交う曖昧模糊とした季節。長雨の合間、晴れた朝に大きな茸が忽然と現れました。本体は土中の粘菌、地上の茸はその胞子嚢で、ここから胞子が飛び散り増殖する。これまでに大分、正体不明の茸を食べて来たせいか、どんな粘菌にも親しみを覚えます。粘菌のおもしろさは、植物か動物かに易々と分類しえないこと。胞子によって増殖するところは植物の様態ですが、葉緑素を持たないし運動力があるので、動物にも似ています。学名は「mycetozaa/ミケトゾーア」、ギリシア語とラテン語の合成語で「動物菌」と訳されるそうです。

20世紀の思想や音楽に大きな影響を与えたジョン・ケージ (John Cage 1912~92)。私もひっそり末席にいて、いろいろな局面で感銘を受けました。ケージは茸の研究家でもあり、自然や芸術、歴史や社会を縦横斜めに横断して偽りのない言葉を語り、作曲された音楽はどれも既存の領域を押し広げるようなものでした。

ある菌類学者の報告、「一種類の茸 (ヒトヨタケ) に約80タイプの雌と約180タイプの雄が存在しており、いくつかの組み合わせでは繁殖が可能だが、他は不可能だった」。この報告に呼応して、ケージは次のように述べています。「私達の雌雄の概念は本来遥かに複雑な人間の状態を単純化したものではないか、と考えるようになりました (『小鳥たちのために=第十の対話・性の問題』青土社1982)」。つまり今日の「LGBTQ」という概念が現れるずっと以前に、人間本来の性の複雑さ、性の多様な真実に思い至っていたのです。

ケージはこうした多様な真実に立って次のように語っています。「ある人をあるがままにしておく、そしてその人のことを思いやる、つまり他人のことを思いやる最良の、そして唯一の方法は、その人が自分の言葉で自分のことを考えるままにしておくことです ~ 何も強制しないこと。あるがままにしておくこと、各々の音と同じように、それぞれの人が世界の中心であることを許すことです (『同書=第二の対話・自由と自在』)」。

らい病の人シモン家で、ある女が突然、食事をしているイエスの頭から香油をドボドボ注ぎかけた (マルコ14:3)。換算すれば数百万円の高額な香油を無駄にし (14:4~5)、その強烈な芳香で食事どころではなくなった。女の行動はムチャクチャだが、騒然となっている座の真ん中



でイエスは「するままにさせておきなさい (14:6)」と、さらりと言います。女の行為が狂気であろうと、信仰であろうと、状況がどうであろうと、するままにさせておく。なぜなら女の行為は真実だったから。これが神のまなざし。

一人ひとり、神が手作りなさって存在しています。己が心身をもってこの多様な創造に従いたい。とはいえ私たちは、イエスのように忠実ではいられまい。だが兄弟姉妹に対して200~300タイプくらいを認めることができれば嬉しい。せめて茸の真実くらいは。Ω